

春燈

四月号

4

April 2008



成瀬櫻桃子の句

道分つ袖振山は青葉籠め

俳句「吉野雑唱」昭和四十六年九月号

袖振山は、奈良県吉野山勝手明神の背後の山。天武天皇が吉野宮で日暮れ、琴を弾じ、歌を誦すると、雲中に現れた神女が、歌曲に応じて袖を翻して五回舞った。これが後世の五節の舞の起源と言われている。櫻桃子先生が訪れられた時は美しい青葉季。風に舞う木々に古代の息吹きを覚え、青葉籠めのかがやく景を満喫され、その謂れを受けとめられたのではないだろうか。

末吉治子

成瀬櫻桃子の句

さみしくて虫壳は虫さわがすや

句集『風色』昭和四十二年

この度、句集『風色』『素心』をお借りして全句書き写し、櫻桃子先生と再会を果たしたような思いでいる。豪放磊落にお見受けした先生の内面は、正反対ともいえる哀感と情愛に満ちたものであった。虫を詠んでも、花を詠んでも不遇のお嬢様への思いがほとばしる。

〈親がらす歩み子がらすつづきけり〉天国でのお二人の姿が目に浮かぶようだ。

藤原繁子

西ヶ原日記

(41)

鈴木榮子

ふるさとの寂れはわびし冬の雨
冬麗や真砂女帰りし房総に
房総に帰る真砂女の冬休
香炉峰の雪と見立てて開きけり
雪の日や裾上げに針持つことも

一の橋五の橋渡し冬ざる
土俵囲む裸の弟子の寒稽古
追儼として幼児袴回向院
本所吉良邸納め茶会のありにける
四季吊られ猪は冬毛の温きかな
両国広小路牡丹鍋とて名題なる
山鯨吊られし前を馳け抜けし

北欧紀行

菅澤陽子

ムーミンの国に弾める木の实かな
ノーベル賞のパーティー会場冬灯燦
歩きみし受賞者通路冬あたたか
冬ざれの「ムンクの叫び」聞く夜かな
冷まじや人ひとひとの彫刻塔
晴れ女とはいかぬ日なりし雪女郎
フィヨルドクルーズ日の短さを嘆じつつ
冬濤やまなこ潤める人魚像
冬帽子曜日忘れて遊びけり
募金箱にコイン落とすや冬の旅

谷中天王寺五重塔

俵藤正克

孟蘭盆会五重塔は失せにけり
身にしむや再建是非論ひとしきり
語らざる礎石七夕時雨
五重塔失せし谷中の底冷す
初燕露坐の大仏袈裟懸けに
月おぼろ臉に浮ぶ露伴の塔
のつそりと呑むは十兵衛夕桜
花の雲客待つ粋な女車夫
塔在りし空奪ひあふ夏木立
風薫る谷中ふるさと墳墓の地

当 月 集

鈴木 榮子選



○

早暁や三友凜と冬座敷

畳一枚上ぐれば湖か底冷す

雲腸くもわたや戯あそりて返す根来の盃

青空の忍び笑ひや風花す

孟春や海光きん金色をとり戻し

後藤眞由美

○

枝さきにひろぐる黙や冬櫛

月面へ旅立つごとく着膨れて

雪をんな夫より先に逢うてやる

ひよつとこもえびすも笑めり牡丹鍋

息災やゆるりと寒の水を飲む

○

丹羽香久

カウントし固唾のみけり初日の出

年明けて天井鼠気負ひけり

初夢の正夢たれや宝くじ

背伸びして波濤視けり野水仙

なまはげの悪さする世となりしかな

○

鈴木撫足

貫禄の出初木遣や鳶頭

肌守り緋なるを求む初弁天

初場所の座布団派手に舞ひにけり

大経師秘伝の糊や寒仕込み

里人の返す会釈や探梅行

春燈の句

鈴木 榮子選

風花に白く冴えたる割烹着

東京 高木 曾精

人送る光悦寺坂雪催

大寒や繰り言細る厨妻
一憂は誤診に終り柀挿す

魁の梅の一枝仄明り

仏にも鬼にもなれず年の豆

かはたれに口笛響き春立てり

冬牡丹誰に見せるや厚化粧

翁忌や領脚冷ゆる御堂筋

東京 神山 志堂

枯れかかる悲しみ堪へし寒牡丹
手足荒る独り暮しの老後かな

二尊院藁の形に霜置きて

老いひとり人気がなき家冷えわたる

冬いちご妻のもちだす理外の理

おもむろに添水の音や寒明くる

初夢に東司捜してをりにけり

愛知 後藤 大

脇路や臘梅の香のこぼれをり

埼玉 葉田 忠男

臘梅や農の厠の窓近く

紀の国のつぶよりの星寒の入

早梅や小さき苑の嘯月楼

伊丹への機影全き初日かな

雲払ふ遠天の帰雁母思ふ

斧一打木魂が締むる山始

福島 物江 康平

源氏絵巻見む寒紅を少し濃く

広島 水成 玲子

出逢ひよりはじまる弔辞冴返る
孕まざる牛に思案や雪しまく



余言

鈴木 榮子

初夢に東司捜してをりにけり

神山 志堂

さて、寺といえは東寺は好きなお寺で、五回位は行った。
東寺の大寺のたたずまいが気持ちよい。

そして寺宝の大涅槃図には圧倒される。京都駅から東へ
二、三駅でまだまだ町中。それがよい。お寺ですよ、お寺で
すよ、とアップローチされないうで突然曲ると虚無僧などに会っ
て、有難くなる。ここの涅槃図は猫が向かって左下に描か
れている。茶色の普通の猫である。毎日通って来ていたの
で絵師が入れてやったという。それも仏の功德と思ってい
る。

雪をんな夫より先に逢うてやる

内野 俊子

面白がつて採ったのではない。然し女性心理、女性の気
持をよく突いている。そうおめおめと夫と逢わせてよかる
うはずはない。だからといって柳眉を逆立てるほどでもな
い。夫がどんなに周章狼狽するかと思うと、意外と逆手に
とつてこの夫はこんなに頭が回るかと思うほどすまし込ん
でいる。言を左右にする嘘という言葉は、男のためにある
ものか。然しこの先どう突き詰めても夫婦は似たり寄つた
り、似た者夫婦なのである。独り身の私ですら分かつてい
るのだから、この先も同志として適当に双方で押したり引
いたりするより仕方ないか。

うかうかと毛皮で来たる動物園

忍足ミドリ

うかうかかと面白い。動物園だから、虎も豹も熊も鹿も猿
もみんな本物の毛皮を着ている。中にはちよいと手を伸ば
す猿もいるかも知れないが、相手は純毛の毛皮を纏ってい
る。どう考えても今日作者はうっかりした。——と思うのが
すこぶるおかしい。(以下略)